

## ● 表面を飾るだけのアピールに疑問

かつて土木建設業界には、業界をあげてイメージアップ運動に熱心に取り組んでいた時期があった。ところが近ごろは、まったくトーンダウンした感がある。熱しやすく冷めやすいという日本人の性格が出ているのだろう。技術者不足や高齢化は、確実に進んでいるのだ。

誰もがイメージアップ運動に熱を上げていたころは、言葉を飾りたてたパンフレットや現場の美化運動を見るにつけ、どこか空々しい感じを受けた。大学や専門学校で、土木工学科を環境工学科などと呼んでいるのも、ベールに覆われた気がしてならない。

自分も大学で土木を学んだのだが、それは小さなころから物をつくることに興味があったからだ。「何かをつくってみたい」という漠然とした思いを抱えて、土木の道に進んだ。一方で、カッコいい車に乗って現場を駆け回っている、現場監督の男らしい外面にあこがれたのも事実である。

いま土木建設業界に必要なのは、土木とはまさしく土や水などの自然と対峙する仕事なのだということを、隠さずにさらけ出すことではないか。だからこそ、この仕事にはやりがいがある——そう訴えることの

方が本当だと私は思う。

私自身は、自然環境に関する仕事や広報用のパンフレットの作成など、いろいろな仕事を経験している。純粋に技術的な仕事からは離れているが、これも土木の仕事だと認識している。

平良 久慶 (41, 公益法人勤務)

## ● 近隣対策が“たかり”に化ける

土木の世界に飛び込んで10年たつが、いまだに納得しかねることがある。工事に乗り込んだ地域への、近隣対策に関することだ。

道路や鉄道などの公共施設を建設するために、それまで平穏だった地域がとたんに騒々しい場所となり、迷惑をかけるのは事実である。できるだけ地域住民とうまくやっていこうと、我々は盆踊りや祭りがあれば参加して、協力したりもする。

ところが、である。町会の方から、盆踊りや祭りの際の会場設営や、町会の倉庫の設置を強要されることがある。揚げ句の果てに、町会長の家の修理など、工事とは全く関係ないことまでお願いされる。これはまるで、工事を問題なくやっていこうとするこちらの弱みにつけ込んだ“たかり”ではないだろうか。

話が飛躍するようだが、こんな現実を考えあわせると、先般取り沙汰

されたゼネコン汚職の問題も、日本の国全体にはびこる風習や風土に根ざすものだと思えてしまう。問題があるのは建設業界だけか、と言いたくなる。匿名希望 (34, 建設会社勤務)

## ● 橋が一斉に壊れる日がくる

近い将来、これから30年ほど先かそこらに、橋などの土木構造物が一斉に壊れ始める日がくるだろう。あたかも新婚家庭が購入した電化製品が、しばらくして一斉に壊れ始めるかのように……。こうした問題は、一部の専門家の間ではかなり認識されているようだが、より広く世間に知らせる必要があるのではないか。

大量の橋を、いっぺんに補修したり架け替えたりするのはほとんど不可能だ。いまのうちに、古くなった橋から順に、延命措置などの対策を施しておかなければならない。

高齢化社会の進展に伴い、社会資本に投資できる金額は減っていくことが予想される。それゆえ、できるだけ早く対策を講じなければならない。新設する土木構造物についても、最初から維持管理やライフサイクルコストのことを考慮してつくっておくことが肝要だ。

実際問題、この日本という国、予備・予防的な事柄についてはなかなか

か予算がつかない。土木構造物の維持管理にまつわる問題を広く世間に知らせて、議論を盛り上げていく必要があると思う。

木村 渉 (39, 専門工事会社勤務)

## 一斉に道路の傷みが進む日がある

ちょっと地味ではあるが、「道路舗装や構造物の耐久性と、その維持管理のあり方」といった趣旨の特集をぜひ組んでもらいたい。高度経済成長期に大量につくった道路において、一斉に傷みが進む時期がいよいよ到来すると思われるからだ。

近年では、国の補助事業、県の単独事業ともに、道路補修費を確保するのが大変厳しい状況にある。補修事業の必要性や重要性を一定の基準に基づいて考えることが、大切になってきている。

しかし、補修事業をどう進めるべきかについては、これといった明確な指標がなく、既存の資料をもとに考えているのが現状だ。国をはじめ、どの地方自治体の職員も頭を悩ませているところである。

高野 真太郎 (32, 地方自治体勤務)

## 昔はどんな業界だったの？

ゼネコンに入社して2年目にして、所長と自分のいわゆる二人現場で働

いている。それゆえ、事務から施工管理、役所との折衝まですべてやらせてもらっている。

同期入社の中なかでも私のように、一つの工事を最初から最後まで経験できた人間はいないのではないかな。おかげで自分のためになった。仕事の流れがわかったからだ。

二人現場なので、上司は20歳以上も年上の所長や部長である。夕食などをともにすると、「昔はなあ」といった話に花が咲く。現在のように週休二日制ではなくて、昼夜もなく、残業もつけずにひたすら働いて……。 「昔と今」の違いについて、話は尽きない。

そんなときにいつも思うのは、土木建設業界全体がそんな状況だったのか、それとも自分の会社や、ここ大阪だけがそうだったのか、ということである。

新しい技術や情報は、本誌を読めばよくわかる。昔はどうだったのかも、ぜひ知りたい。

山本 浩昭 (26, 建設会社勤務)

## これからも現場中心の報道を

私は大学院で土木を学び、卒業後は高校で数学を教えてきた。土木を学ぶ過程で微積分を活用するチャンスに恵まれたおかげで、微積分が実際にどのように活用されるかを話し

て聞かせることができた。測量にどれだけ数学が生かされているか、といった話になると、生徒たちは目を輝かせる。

しかしながら一般には、数学が現場や工学から離れてしまったために、生徒は何の面白味も感じていない。そもそも数学科を卒業した教師は、実用のために微積分を活用した経験を持たない。数学離れが起きるのも当然だ。

かつて市民講座で、「橋は荷重でたわむことを想定して、あらかじめ水平より上げておくのだ」という話を紹介したことがある。受講者は、「初めて知った」という人がほとんどだった。

技術や学問が現場でどのように活用されているかを見せてあげることが、人々の興味を起こさせる最大の鍵になると思う。これからも現場から離れることなく、素晴らしい技術をわかりやすく紹介し続けてほしい。

橋本 勇一郎 (52, 高校教師)

本欄への投稿を歓迎します。掲載時には、確認のご連絡を差し上げますので、必ず、お名前と住所、電話番号を明記して下さい。掲載分には薄謝を進呈します。

[宛先]

〒102 東京都千代田区平河町2-7-6

日経BP社 日経コンストラクション編集  
ねっとわーく係 FAX03-5210-8255